



Data

監督: 関根光才
出演: 赤坂憲雄/安藤礼二/糸井重里/植田昌吾/大杉浩司/奥山直司/嵩英雄/唐澤太輔/小林達雄/コンチヨク・ギャムツォ/佐藤玲子/榎木野衣/シャーラブ・オーセル/ジャスティン・ジャステイ/菅原小春/春原史寛/関野吉晴/館鼻則孝/千葉一彦/Chim↑Pom/土屋敏男/中沢新一/長野泰彦

■■■ショートコメント■■■

◆三波春夫をはじめ多くの歌手の“競作”となった『世界の国からこんにちは』の大合唱の中、1970年に大阪北部の千里丘陵で開催された“大阪万博”には世界各国から6400万人が集まった。そのテーマは「人類の進歩と調和」だったが、その象徴は「芸術は爆発だ!」の言葉で有名な、岡本太郎作の“太陽の塔”だった。

当時学生運動のまっただ中にいた私は、そんな“世間の流行”にハマることはなかったので、万博の見学はわずか1回のみ。当時長い列をなして並んでいた、アポロ計画を象徴するアメリカ館の“月の石”も見していない。そのため、当時“太陽の塔”の印象も全くなかった。

◆万博終了後は万博会場内の建物はすべて解体され、敷地は公園とされたが、太陽の塔だけは残された。それは一体なぜ? また、高さ70mもあるあの異様な建造物(?)の内部はどうなっているの? そんな疑問や興味に答えるべく、2018年3月19日からは大規模な修復の末にその内部が公開されている。さらに、2018年9月15日から11月4日まで、あべのハルカス美術館で太陽の塔の展覧会が開催されている。

◆本作はドキュメンタリー映画。そして、監督は公募で選ばれたという日本を代表する若手映像クリエイターの関根光才だ。また、その構成は、1章 EXPO 万博、2章 CREATION 創造、3章 TARO 太郎、4章 ORIGINS 起源、5章 SYSTEM 支配、6章 MYTH 神話、7章 RESONANCE 共鳴、8章 MANDALA 曼荼羅、9章 GIFT 贈与に分かれており、総勢28名のアーティストや学者、研究者、宗教家たちが次々とインタビューに答える形でストーリー(?)が進んでいく。

たしかに、このように構成された本作を観れば、岡本太郎がなぜ太陽の塔に挑んだのか? また、そこに何を求めたのか? ということが少しは見えてくる。しかし、いくらドキュメンタリー映画とはいえ、これでは映画といえるの・・・?

2018 (平成30) 年10月18日記



Data

監督・脚本：宅間孝行
出演：立川談春／原田知世／倉科カナ／市原隼人／入山杏奈／高橋メアリージョン／やべきょうすけ／布川隼汰／トミーズ雅

■■■ショートコメント■■■

◆宅間孝行は彼が初監督し主演もした『同窓会』（08年）（『シネマ20』353頁）を見て感心した監督。それがあったため、「逢いたいのにずっと逢えずにいた父と娘の愛にあふれた5日間の物語」だという本作に興味をもち、試写室に行くことに。

◆父親の六郎役を演じる落語家の立川談春の演技には違和感があるが、その内縁の妻・松岡玉枝役を演じる原田知世の演技の安定感はさすがだ。また、まだ見ぬ父を捜すために父親が住んでいる田舎町にやって来た高島さつき役を演じる倉科カナの演技も、長い間女優業をやってるだけあって立派なものだ。感情の起伏が激しい本作の演技は大変だが、酔っ払いの演技を含めて、その感情を見事に表現している。

その他、物語の牽引役となるテキ屋の雨宮清太郎（市原隼人）や、その友人の的屋・福田日出子（高橋メアリージョン）、竹内力也（やべきょうすけ）たちの演技も少し過剰演出気味だが、それなりのもの。

◆本作で六郎が東雲六郎と名乗り、また経営している塾の名前を東雲塾としているのは一体なぜ。他方、なぜ六郎は玉枝を入籍して正式な夫婦にならないの。そんな疑問が本作冒頭の謎めいた“高島六郎”の失踪シーンとともに、何度も頭をよぎるが、それが宅間監督の狙いらしい。そういう意味では、多分彼が主催しているタクフェスでの舞台『あいあい傘』もよく出来ているのだろう。そして、昔の“嘘の母”を彷彿させる（？）本作のクライマックスにおける父娘のシーンでは・・・？

◆それなりの制作目的をもった本作だが、ストーリーの基本軸は単純そのもの。また、宅間監督が描く「あいあい傘」のイメージはよくわかるが、今ドキの若い世代にそれがどこ

まで通用するのは疑問だ。しかし、私としては『あいあい傘』というタイトルに彼の思いを込めた本作がそれなりにヒットすることを期待したい。

2018（平成30）年10月19日記



Data
監督: 福澤克雄
原作: 池井戸潤『七つの会議』(集英社文庫刊)
音楽: 服部隆之
出演: 野村萬斎/香川照之/及川光博/片岡愛之助/首尾琢真/藤森慎吾/朝倉あき/岡田浩暉/木下ほうか/吉田羊/土屋太鳳/小泉孝太郎/溝端淳平/春風亭昇太/立川談春/勝村政信/世良公則/鹿賀丈史/橋爪 功/

■ショートコメント■

◆2005年11月に突如発覚した1級建築士による“耐震強度偽装問題”は建築法制の根幹を揺るがす大問題として日本国中を震撼させたが、今年2018年10月には油圧機器メーカー大手のKYBによる免震・制振オイルダンパーの検査データ改ざん問題が発覚した。改ざんの疑いのある免震・制振装置は全国で987件、計1万928本に上るそうだ。公表された対象物件は官公庁舎が多数あり、原子力発電所や五輪関連施設、空港等もある。そして、未公表物件の3割近くがマンションなどの住居らしい。企業の不正行為はこればかりではなく、2015年の東洋ゴム工業の免震偽装があったし、近時はSUBARU (スバル) の出荷前の完成車検査に関する不正等がある。

それに対して、池井戸潤の原作を映画化した本作では、都内にある中堅メーカー・東京建電とそのネジの下請け会社が結託した“ネジの強度偽装問題”がテーマ。そのネジは航空機や新幹線の座席にも使用されていたから、もしそれらが本来備えるべき強度を保っていないとすれば、人命の危険は・・・？

◆本作冒頭に見る、東京建電の営業会議での北川部長 (香川照之) による営業ノルマのかけ方はすごい。というより、これは異常だ。昭和のモーレツ社員の時代ならまだしも、平成が終わろうとしている今、営業ノルマを巡ってこんなハチャメチャなハッパをかける会社は存在しないのでは？まあ、映画だからそれを誇張するのはわかるが、この演出はあまりにあまり・・・。

また、演技する香川照之も、そして北川部長と同期入社ながら今はなぜか「居眠り八角」と呼ばれ、出世競争から完全に脱落してしまった八角民夫 (野村萬斎) もキャラが立ちすぎて、過剰演技気味だ。もっとも、実際にストーリーを牽引していくのは、八角からのパ

ワハラ告発で人事部に左遷されてしまった、北川部長の秘蔵っ子だった営業第一課長の坂戸宣彦（片岡愛之助）に代わって新課長に就いた“常識派”の原島万二（及川光博）と、社内不倫に悩むしがらない女事務員・浜本優衣（朝倉あき）だが・・・。

◆かつて“無責任男”で一世を風靡した俳優兼歌手の植木等は「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ・・・」と歌ったが、現実は逆で、サラリーマンとは何と辛いもの。本作を見ていると、つくづくそう思ってしまう。出世競争、ゴマすり、社内派閥、取引先接待、社内不倫等々の問題点の他、本作を見ていると、東京建電という1つの会社内部での“営業部と人事部の対立”がこんなにもすごいことにビックリ！

もともと一匹狼の傾向が強い私は、司法試験に合格できたことによってサラリーマンにならずにすんだことを、とにかく感謝！

◆「七つの会議」というタイトルに象徴されるように、やたら“会議”が多いのが日本の会社（組織）の特徴だが、本作に見る「七つの会議」とは一体ナニ？

北大路欣也は今や大企業のトップに君臨する大社長役がピッタリの年齢になっており、本作ラストでは親会社であるゼノックスの代表者としての貫禄を見せつけてくれる。しかし、“御前会議”と称されるその会議での、彼の発言（決済）はあつと驚くものだから、それにも注目！

◆映画としてはイマイチでも、テレビドラマとしては十分面白い本作では、ラストに見る八角の“独白”に注目！石川五右衛門は釜ゆでの刑に処せられるに際して、辞世の句として「石川や 浜の真砂は 尽くるとも 世に盗人の 種は尽きまじ」と詠んだが、八角の“独白”はそれと同趣旨で、日本では会社（組織）の不正は永久に変わらないというものだ。

また、それは、『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）が教えてくれた、“悪の陳腐さ（凡庸さ）”の教訓と同じ。つまり、人間は弱い存在で、決して正義や倫理に基づいて行動する動物ではない、ということだ。私は全くそれに同感だが、それでは、どうすればいいの・・・？

その“答え”は誰にも見つからないが、私は八角の“独白”のように「××すれば、ひょっとして少しは不正が減るかも・・・？」という程度の考え方に賛成！

2018（平成30）年11月8日記



Data

監督・脚本：野尻克己

出演：岸部一徳／原日出子／木竜麻生／加瀬亮／岸本加世子／大森南朋／吉本菜穂子／宇野祥平／山岸門人／川面千晶／島田桃依／金子岳憲／レベッカ・ヤマダ／政岡泰志

■■ショートコメント■■

◆本作は新聞の映画批評では、かなり好評。11月9日付朝日新聞夕刊は母親役で出演した原日出子を大きく取り上げていたし、11月15日付日経新聞夕刊の「文化往来」では「新人・野尻克己監督、渾身の家族劇」の見出しで絶賛していた。そこで、“こりゃ必見！”と思って映画館へ行ったが・・・。

◆冒頭、鈴木家の長男・浩一（加瀬亮）がいきなり首つり自殺をするシーンが登場する。これは、本作が監督デビュー作となる野尻克己のかなり思い切った演出だ。しかし、二階の浩一の部屋でそれを発見した母親の悠子（原日出子）が、一階に包丁を取りに行ったのは一体なぜ？

それ以降は、死の淵から奇跡的に戻ってきたにもかかわらず、記憶を失ってしまった悠子に対して、鈴木家の家長・幸男（岸部一徳）、自殺した浩一の妹の富美（木竜麻生）、そして悠子の弟の博（大森南朋）が「浩一はアルゼンチンで働いている」という「嘘」をつき通すという物語になる。それは一見『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）（『シネマ1』50頁）でみた“高貴な嘘”と同じように、必要不可欠な“鈴木家の嘘”だと思って期待したが、さて……。私には『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』の出来とは雲泥の差だ。これでは……。

◆浩一が自殺したのは、なぜ？それは“人生がつかなくなったため”らしい。そんな自殺の動機はともかく、冒頭で提示される「自殺」というテーマはいかにも重い。そして、前述の日経新聞によると、野尻自身も兄を亡くした体験があるらしい。しかして、本作は悲劇調になったり、喜劇調になったりしながら、“鈴木家の嘘”をテーマに物語が展開していくが、残念ながら私の目には途中からバカバカしく……。

◆本作に見るソーブランドの物語は一体ナニ？また、ラストの霊媒師の物語は一体ナニ？途中で迫真の演技を見せる富美の悲しみや、浩一がアルゼンチンにはおらず、死亡したことを知らされた悠子の悲しみは十分伝わってくる。しかし、残念ながら私は全然それに共感できなかった。また、富美は「生きてる意味がないのなら死ねば！」とお兄ちゃんに言ったことをしきりに後悔し、自分も一度は川の中に入ろうとしたが、それも私の目にはナンセンス。むしろ、悠子が言った言葉のほうが正しいのでは？私にはそう思ってしまうが・・・。

◆まあ、今ドキ 1 人の若者の自殺という重いテーマを映画にすれば、いかにもとってつけたような本作のような脚本になるのは仕方ないのかもしれない。しかし、『鈴木家の嘘』と『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』との映画としてのレベルの差は私には歴然だ。

2018 (平成30) 年11月28日記



Data

監督・脚本：広瀬奈々子

出演：柳楽優弥／小林薫／YOUNG
DAIS／鈴木常吉／堀内敬子
／芹川藍／高木美嘉／清水
葉月／竹井亮介／飯田芳／
岩崎う大

■■■ショートコメント■■■

◆本作の監督は、是枝裕和、西川美和の愛弟子である広瀬奈々子。彼女は是枝監督の『そして父になる』（13年）（『シネマ31』39頁）、『海街diary』（15年）（『シネマ35』未掲載）『海よりもまだ深く』（16年）（『シネマ38』250頁）、そして西川監督の『永い言い訳』（16年）（『シネマ38』94頁）に助監督として参加してきた、1987年生まれの期待株。そして、自ら苦勞して書いた脚本で監督デビューしたのが、本作だ。

本作で本名を明かせないある秘密を抱えた主人公シンイチを演じるのは柳楽優弥。他方、8年前にある事情で妻と息子を失った木工所のオーナー、涌井哲郎を演じるのが、ベテラン俳優小林薫だ。すると、本作のテーマは、家族、喪失、絆、再生、そしてタイトルの“夜明け”。そう考えると、こりゃ“期待大！”そう思ったが・・・。

◆本作は、川辺で倒れているシンイチを哲郎が発見し、家に連れて帰るところからスタートする。シンイチの中に、死んだ息子の面影を感じ取ったらしい哲郎は、以降、一方では従業員のように、一方では息子のようにシンイチに接し始めたが、そもそもその流れがいかにも不自然だから、私にはアレレ・・・。また、木工所の事務員の成田宏美（堀内敬子）と哲郎は近々結婚式を挙げるそうだから、それもアレレ・・・。さらに、ベテラン従業員の米山源太（鈴木常吉）も、若手従業員の庄司大介（YOUNG DAIS）も、しきりにシンイチを仲間のように接しようとしているが、これもアレレ・・・。

◆2011年3月11日の東日本大震災の直後に社会人となった世代である広瀬監督は、本作で人間の「弱さ」を見つめ、社会で挫折した人間が逃げずに自分と向かい合うまでの道のりを描きたかったようだ。しかし、本作に見る、弱さのさらけ出し合い、なめ合いのような姿をみていると私はウンザリ。そもそも、運転免許証も住民票も持たない幽霊のような若者を、今の日本社会でどうやって雇用するの？しかも、哲郎はシンイチとわが子のように接しているから、養子縁組の話までいくのかと思うと、それはなしだからアレレ。

この手のカッコだけの問題提起型脚本は、私にはノーサンキューだ。

◆将棋や囲碁の世界、またスポーツや芸能の世界での一部の若手有望株は別だが、今ドキの若者は状況を読めず、状況対応能力に欠けるヤツが多い。また、“パワハラ批判”がある一方、ろくな仕事もできないくせに、「これは僕に向けた仕事ではありません」などとぼざいて放り出す若者も多い。そんな世相を嘆いている私には、広瀬監督の描く、シンイチやその他の若者たちへの不満が強くある。哲郎と宏美の結婚式が最悪の事態になったのは、その席でシンイチをわが子のように紹介し、無理矢理彼にマイクを向けた哲郎の責任が大だが、そこで「僕の名前はシンイチではありません。」と告白するシンイチの状況対応力のなさには唾然!こりゃ、一体どうなってるの？

◆“父と子の絆” と言えば、11月23日に「生誕百年 追悼橋本忍映画祭」で観た『砂の器』(74年)における巡礼の旅の“父子の絆”は涙、涙の物語だった。同作では、一言のセリフもない子供役の表情だけの演技が強く印象に残ったが、本作ではシンイチが哲郎の元を去っていったのはある意味当然。そこで私の興味は、その後シンイチはどこへ行くの？ だったが、さて広瀬監督はそれを本作でどう描くの？

11月17日に観た『アンナカレーニナ ヴロンスキーの物語』(17年)は、アンナが鉄道自殺した後の、アンナの恋人だったヴロンスキーとアンナの一人息子セルゲイとの対決を描いていたが、それによるとヴロンスキーにもアンナの自殺は謎だったらしい。しかし、本作ラストにはいかにも飛び込み自殺するのにぴったりの海の風景が登場し、さらにシンイチが往来する踏切の前で立ち止まる姿も登場する。すると、そこでシンイチはどうするの？ひょっとして、シンイチもアンナのように・・・?いやいや・・・?

2018(平成30)年11月30日記



Data

監督・脚本：中島哲也
 原作：澤村伊智『ぼぎわんが、来る』
 (角川ホラー文庫刊)
 出演：岡田准一／黒木華／小松菜奈
 ／青木崇高／柴田理恵／太
 賀／志田愛珠／蜷川みほ
 伊集院光／石田えり／松た
 か子／妻夫木聡

■ショートコメント■

◆「こわいけど、面白いから、観てください。」をキャッチコピーにした中島哲也監督の最新作と聞き、こりゃ必見！中島監督の『パコと魔法の絵本』(08年)はイマイチだった(『シネマ20』246頁)が、『下妻物語』(04年)(『シネマ4』323頁)、『嫌われ松子の一生』(06年)(『シネマ10』360頁)、『告白』(10年)(『シネマ25』51頁)はすべて面白かった。もっとも、私は基本的にホラーは苦手だから、ホントは「最恐エンターテインメント。」と言われると腰が引けるのだが・・・。

◆冒頭から、“昭和を代表する気楽なサラリーマン”植木等の“平成版”かと思われるような会社員、田原秀樹を演じる妻夫木聡のテンションが高い。それに対して、新妻の田原香奈(黒木華)は秀樹の口やかましい親戚たちから“暗い”と言われているが、大丈夫？ 待望の赤ちゃん・知紗が生まれた後の、秀樹のイクメンパパぶりはさらにすごい。私の周りにもフェイスブックに夢中の人がチラホラいるが、秀樹レベルになると、まさにブログにアップすることが人生のすべてのようだ。しかし、トランプ大統領のツイッターは全世界の人々が注目しているのに対し、秀樹のブログをホントに見ている人は How many？

◆近時、貴乃花と花田景子夫人が、さらに及川光博と檀れいの離婚が報じられた。そのホントの離婚理由は外部にはわからないが、秀樹・香奈夫妻もブログ上の仲睦まじさとは裏腹に、かなりヤバそうだ。しかして、その原因は？

本作中盤は、オカルトライターの野崎(岡田准一)の下を秀樹が訪れるところからスタートする。秀樹は「最近身の回りで超常現象としか言いようのない怪異な出来事が相次いで起きている」と野崎に相談したわけだが、秀樹の友人の民俗学者・津田(青木崇高)の

説ではその何かとは、田原の故郷の民間伝承に由来する“ある化け物”らしい。

本作中盤では、子供時代の秀樹が女の子と一緒に遊んでいる時の不気味なシーンが登場するが、田舎にはどこにでも“人さらい”の伝説があるらしい。しかして、秀樹の故郷の“お山”には“あれ”が・・・？そして、“あれ”が“来る”と、かなりヤバイことに・・・。

◆野崎に続いて、本作には、①野崎が秀樹に紹介したキャノ嬢の霊媒師・真琴（小松菜奈）、②真琴の姉で、日本最強の霊媒師・琴子（松たか子）、③TVで有名なタレント霊媒師・逢坂（柴田理恵）というケツタイなキャラが次々と登場する。そして、それぞれケツタイな自説を展開するが、私はそこらあたりから少しずつ本作がバカバカしくなってくることに・・・。

『告白』では松たか子の熱演が光っていたが、あえて抑揚のないしゃべり方で通した本作での松たか子の演技はイマイチ。岡田准一も、『永遠の0』（13年）（『シネマ31』132頁）はもちろん、『海賊とよばれた男』（16年）（『シネマ39』68頁）、『関ヶ原』（17年）（『シネマ40』178頁）、『散り椿』（18年）で主演した時の演技に比べれば、本作ではおびえて逃げ回るだけの演技なのでアレレ・・・。柴田理恵に至っては、私には観る気もしないレベルだ。まあ、ワケのわからないホラーでは、こけおどしの演技とこけおどしの演出で物語をつなぐしか方法がないのかもしれないが・・・。

◆映画はクライマックスが重要。11月23日に観た『砂の器』（74年）の長い長いクライマックスは最高だったが、本作のクライマックスは関係者一同を集めた大規模なお祓いのシーンになる。プレスシートで中島監督は「映画の終盤には大掛かりなお祓いのシーンがあるので、見終わった人に『ああ、面白いライブを観たな』くらいに思ってもらえたいと思います。」と語っている。

たしかに、これはよく構成されたライブだが、一体何のためにやっているライブかわからないのが玉にキズ。イクメンパニに徹していた秀樹の“嘘つきぶり”は中盤から明白になるし、一見良妻賢母のようだった香奈も、秀樹の長年の親友のようだった民俗学者・津田も、その邪悪な心の底や不倫ぶりがバラされてしまったが、これらの邪悪さは人間なら誰でも持っているものだ。お祓いでそれがすべて解決できれば問題はないが、そうは問屋がおろさないのでは・・・？

2018（平成30）年12月5日記